

大原社事

吉田社事

此二社者春日^乎勸請^乃社也、依所^仁稱彼名^於、歟、被祭^{本社}上^和、後代勸請^乃神^{爾天}、同時^仁被祭
 事^无其謂歟、然而藤氏^乃繁昌^乃後、風儀尊崇相同哉、氏^后和^{奈度}大原野^仁行啓^寸、昔^乃與里^{事也}、已上
 〔伊勢物語^上〕昔二條の后^{清和}藤原高子^后の春宮のみやす所と申けるころ、氏神にまうで給けるに、つか
 うまつれりけるこのゑづかさなりける翁^業、^平在原^{人々}のろく給はりけるついでに、御車より給
 はりてよみて奉る、

大原や小鹽の山もけふこそは神世のこともおもひいづらめ^今又^見古^{歌集}

〔大鏡^七太政大臣道長〕春日の行幸は、さきの一條院の御時よりはじまれるぞかし、それに當代^一後^條

おさなくおはしませせども、かならずあるべき事にて、はじまりたるれいになりたれば、大宮^彰
 子御こしにそひ申させ給ひておはします、よのつねならずどきの御おほぢにてうちそひつか
 ふまつらせ給ふ、殿^{藤原}の御ありさま御かたちなど、すこしよのつねにもおはしませましか
 ばあかぬ事にや、そこらあつまりたるゑなかせかいのたみ百姓、これこそたしかにみたてまつ
 りけめ、たいてんりんしやうわうななどは、かくやとひかるやうにおはしますに、佛を見たてまつ
 りたらんやうに、ひたいに手をあて、をがみまよふさまことわりなり、大宮のあかいゝの御あ
 ふぎ、御かたの程などはすこしみえ給ひけり、かばかりにならせ給ひぬる人は、つゆの御すきか
 げもふたぎ、いかゞとこそもてかくし奉るに、ことかぎりあれば、けふはよそほしき御ありさま
 も、すこしは人の見たてまつらんもなごかはやともやおぼしけん、どのも宮もいふよしなく御
 心ゆかせ給へりけることおしはかられ侍るは、殿、大宮に、

そのかみやいのりおきけんかすがの、おなまみちにもたづねゆくかな、御かへし、